

戦後主体性論争ノート

——三木清論・補論の五——

永野基綱

一
本ノートでは、いわゆる哲学に於ける主体性論争をめぐって、一九四八年までの梅本克己の所説を整理する。

周知のように、いわゆる主体性論争は、雑誌『近代文学』の創刊と共に、つまり、いわば戦後文学の地平の設定と共に、まず文学の場で開始されたが、この文学に於ける主体性論争が、戦前の諸文学論争をうけ、またより以上に戦後の諸文学論争へとつながっていく、いかに重要な意味をもつものであったかということについては、ここで改めていう迄もないだろう。

一方、哲学に於ける主体性論争は、文学に於けるそれなどと密接な関連をもちつつ、一九四七年はじめに開始されたものであって、一般にそこで提起された問題の重要性、またその後の問題の拡りに於いて、文学に於けるそれが戦後文学史のうちにもったに勝るとも劣らない意味を、戦後思想史のうちにもつとされている。そして、その論争の問題提起者であり、且つ、一貫して一方の当事者であり続けたのが、梅本克己に他ならない。

だが、しかし、現時点から振り返ってみるならば、この論争そのものを今改めてとり上げ、主題的に再検討する余地は、ほとんどないといってよからう。梅本をはじめとする主体性論者と党派的な正統唯物論者たちの

間に展開した狭義の論争そのものは、ほとんど完全に不毛のまま終焉してしまったこと後にも見る通りである。一方確かに論争の問題提起は、最広義にいえば、スターリン批判以下ロシア・マルクス主義の権威失墜の下で、実存主義の世界的流行に象徴される思想状況に应じつつ、初期マルクスを重視し、いわば主体的マルクス主義とでもいったものを再構築しようというような方向へ向う一つの大きな潮流の始まりとして位置づけられえもしよう。が、しかし、それ故にこそ、論争に萌芽をもつ問題でおおよそ意味ある程のものは、ほとんどそのようなより広い場所で検討された諸問題に含まれるのであって、その意味で、右の大きな潮流そのもののさえも、既にもはや明らかな限界を確認されている今、その始りにあえて再び主題的に立ち返り、それを思想的出発点とすべき意味は、ほとんど残ってはいないといつてよい。いいかえれば論争は、もはや一つの歴史的事実となつていたのである。

小論がこの論争を扱うのもまた、三木清論との関わりで、三木とこの論争との一つの問題史的関連を探ってみる為の準備作業としてにすぎない。

例えば、山崎昌夫は、他ならぬ三木清を「主体性論の源流」とみて、次のようにいう。「……三木は唯物論哲学のサンクチュアリにくだり、
「主体性」の問題に独自の決着をつけたことはたしかである」、と。「決着をつけた」といえるかどうかは、もとより簡単に判定はできない。だ

が、例えば、広松渉をして三木論の「準抛粹」を設定したといわしめた久野収も、次のようにいう。「三木がマルクス研究を通じて、第一に気づかせられたのは、実践主体の問題であった。実践主体と理論主体との関係の問題であった。……実践主体、考えられた実践主体ではなく、実践主体としての実践主体をつつみうるような理論体系は、はたして構築可能なのであるか。実践主体は、理論主体をこえる。こえられた理論主体は、もう一度、実践主体をつつみこもうとする。実践主体が現実に応用する理論体系ではなく、実践主体そのものをつつみ理論体系の構築こそ、哲学が古来、くり返し、くり返し、こころみつづけてきた冒険ではないのか。当時の日本の第一線のアカデミー哲学が共通のテーマとしたのは、この問題である」。そして久野は、この、「三木を焦点の一つとする思想状況」について、「戦後の主体性問題の思想的原点も、実はここにひそんでいるのである」、というのである。

一方しかし、例えばまた菅孝行は、戸坂潤と三木の間には「千里の径庭があった」といつつ、その上で戸坂こそが、一つの「根源的な問題にとりくんだのであった」のであり、そして「その主題は、一〇年後の主体性論争の先駆でもある」、という。つまり菅は、三木ではなく戸坂こそを、この論争で扱われた問題の、「すばぬけて先駆的な」提起者であった、というのであって、逆にいえば、そのことで三木の先駆性を否定するのである。

ところがまた他方、例えばいいだ・ももになると、次のように見る。即ち彼は三木、戸坂について、二人は互いに「……酷似していながらも、八人間学Vと八存在論Vというそれぞれの一身上の氏素姓のちがいに最後までたられ、引き裂かれていたように思われます」といった上で、「この人間と存在との間のクギャップの問題は、戦後にいたって八主体性論争Vとしてもう一度、亀裂なり空隙なりを露呈させます」というのである。

このように、今仮に三木と戸坂の間を、主体性論争から振り返ってみるだけでも、その論争の先駆的源流は、三木に、また戸坂に、またむしろ両者の間に、と様々な形で求められているのであって、この意味で、論争は

なお三木論にとって無関心事ではないのである。勿論そのことは、論争の当事者が、とりわけ三木を既に意識していたということを意味するのでは全くない。例えば梅本は五一年「三木哲学と唯物論」なる論文を書いてはいるが、そこでは三木を例えば主体性論にとりわけ関わらせて捉え返そうといった姿勢などは全く見られない（但し、五九年に論争当時の自らをふり返って書いた「過渡期の意識」では、三木に一ヶ所言及している）。そしてまた、もとより本ノートも、主体性論争と三木との思想的関連そのものを、直接とり扱って論じようとするものではなく。今はただ、右にあげたような論者たちの言を、そのまま例示しておくにとどめて、戦後の主体性論争そのもののみをとり上げるにすぎない。

二

哲学に於ける主体性論争の前提として、二つのものだけをあげておく。一は、前述の、文学に於ける論争である。周知のように雑誌『近代文学』は、一九四六年一月に創刊されたが、「戦後文学のテーマ・セッター」（鶴見俊輔）たる荒正人、平野健ら「近代文学」派は、戦後文学の出発点に当って、あらゆる文学的創造活動の起点を、「政治」から自立した「私人」に据え直そうとした。とはいえ勿論それは、「エゴイズムを通じて……ふたたび高次のヒューマニズムを模索しよう」（荒）とする限りに於いて、なお「政治」的な、「ひとつの反措定」（平野）であった。当然、予想される反論が「政治」の側からおこる。狭義には『近代文学』第二号に掲載された荒正人「第二の青春」に始まる論争の推移についてはここでは触れないが、一年後の梅本の問題提起と論争の背景の一つは、いう迄もなくここにある。

そして今一つは、戦後の西田、田辺哲学批判の問題である。周知のように、京都学派を中心とするアカデミー哲学の戦後発言は、戦中八聖戦V理念の世界史的基礎づけの役割を果たした京都学派の思想に対する自己批判を、ほとんど全く踏まえてはいなかった。『近代文学』創刊と同じ月に創設されたいわゆる民科の哲学部会を中心とする唯物論哲学陣営が第一にと

りあげたのが、この、西田、田辺批判であった。第一に、対立の媒介統一者としての天皇観及び階級協調主義に基く反共社民主義にみられる、その政治哲学の反人民性。第二に、その根底にある絶対的弁証法の観念的、神秘的性格、それらが、彼らのとりあげた主な批判点であった。

ある意味では、梅本は、田辺に於ける個と全の弁証法を、文学に於ける論争でとり上げられたエゴイズムの問題に於いて捉え返していった、といつてよい。あるいは逆に、後者のテーマを前者の領域で論じていった、といつてもよい。ともかく、梅本は、四六年八月二〇日に書き了え、そして四七年二月、二・一ゼネストをめぐる騒然たる状況の下、民科哲学部会機関誌『理論』創刊号と同じ月の『展望』に発表した論文、「人間の自由の限界」（第一論文と略称、以下同様）で、戦後論壇に登場した。そして更に、前論文執筆一年後の四七年九月一日の日付をもち翌月号の『展望』に発表した「唯物論と人間―マルクシズムと宗教的なるもの―」（以下第二論文）によって、いわゆる主体性論者として華々しい論争の舞台に入つてゆくのである。

これらの論文での梅本のマルクス主義理解の浅さや、また彼の観念論的発想を今更言あげしても意味はない。梅本にとってこれらの論文は、後『唯物論と主体性』に収録（五九年）するさいの「追記」によれば、「私にとつては戦後思想の出発点であり（第一論文）、また「ジャーナリズムの上では、哲学における主体性論争の出発点のような形にな」つたもの（第二論文）であるが、しかし既に彼自身、「問題提起の方法そのものが非マルクス主義的であ」つて問題が「きわめて観念論的な形で提出された」といつているのである（六一年「過渡期の意識」）。ここではただ、梅本一流の論理と非論理の錯綜の中から、行論に必要な彼の所論の中心核をとり出しておくにとどめる。

第一論文で既に梅本主体性論の前提たる人間、歴史観が出現している。彼はまず人間を自己意識と捉えつつ、物質からの自己意識の成立は「科学」によつては捉えられないという。更にまた人間を行爲主体と捉えた上で、自発的決断の自由の背後は「科学」によつては捉えられないという。彼にとつて人間の行爲、従つてまた歴史そのものは、「無からの創造」に

基いているのであって、「科学」はこの、歴史的必然の背後の「深淵」については「答えるところを知らない」のである。

行爲主体としてのこの個人は、第二論文以下では、より田辺的な場面で論じられる。歴史に於ける個の「無からの創造」は、全に対する関係についていえば「個の全に対する背反」となる。無からの行爲者たる個は全に対するこの背反に於いてのみ「個」たりするのであって、この問題もまた、梅本によれば「科学」を超えている。「科学」は人間性の分裂を客観的条件の矛盾に求めるが、しかしその矛盾も、人間性そのものに於ける個と全の分裂可能性に於いてのみ現実化しようというのである。

三

梅本が「科学」という時、それがマルクス主義を指していることは、改めていうまでもないだろう。だがそのことは、逆に、梅本がマルクス主義を「科学」として捉えていることを示している。彼が「マルクシズムの科学的真理」という時、それは「客観的な歴史的必然」の「洞察」を意味する。いわゆるスターリニズム哲学の基本特徴をこの文脈でいうなら、それは第一にいわゆる「客観主義的」に解された弁証法的唯物論と、第二にその「適用」としての同じく「客観主義的」な史的唯物論である。当時としては当然とはいえ、梅本はさし当りこのような「唯物論」を「科学」の名で一方に置くのである。

そこで問題は、梅本がそのような「科学」に対して、先にみた自らの問題意識を、どのような関係に置いたか、ということである。後年梅本は、当時をふりかえつていつている。「ぼくがサルトルとちがうのは、唯物論の一般的前提、それは認めていたんです。その点ははっきりふみ切つていた」（『思想の科学』六八年五月）。その「一般的前提」がどのようなものであったかは別としても、問題はその前提に対して、自らの提示した問題をどのような関係に置こうとしたか、である。彼は一方で、人間は自発的決断の背後に「無」をもつがこの「無」は「科学」によつては捉えられないし、また、個人は根源的に全体に対する背反可能性をもつがこの可能

性は「科学」によつては捉えられないという。そして他方、マルクス主義を「科学」として捉える。前者の次元での「無からの創造」としての歴史と、後者の次元での「客観的必然」に基づく「科学的真理」としての歴史。抽象的次元でいうなら、人はここに二つの相容れない歴史概念を見てよい筈である。

こうして梅本は、第一論文では、ほとんどマルクス主義「科学」の批判者の如くに論述する。彼は「歴史を階級闘争の歴史と見ることは自ら限界がある」といい、「マルクス主義の哲学において、人間における自由の、その可能性の背後がどれほどまでに自覚されているか」と疑問をなげる。そして「唯物弁証法」が人間の思惟と行為の「自由の可能性の根拠を……物質の高度の運動に接収したとき、それは明らかに形而上学のうちにふみこんだといえる」のであり、たゞ口でそれを否定しているにすぎないと断ずる。つまりここでは、「科学」の扱いえぬ領域を示すことによって、「科学の限界」を明らかにし、あくまで「科学」の立場にとどまるマルクス主義の「人間的規定」には欠陥があるのではないか、というのである。

だが、第二論文になると、梅本は、一方では勿論前論文同様、「科学的洞察の埒外におかれ」ている問題領域の存在を強調し、否むしろそのような領域での人間規定をより根源的なものと見た上で、「この人間規定とマルクス主義の人間規定とはどう関係するか」というような問題の立て方をするのであるが、他方では、その領域を「空隙」と呼びつつも、それが「マルクス主義そのもの立場でみたまされ」る可能性、「埋められ」る可能性を積極的に主張するようになる。とはいえ、もし梅本が、「無からの創造」とか「個の全への背反」とかをあくまで抽象的觀念の領域で議論し続けていたなら、アポリアを脱出する方途はなかったであろう。

しかし実は梅本は、既に巧みに論の重点を移していたのである。「無からの創造」から「個の全への背反」への論点の移行は、一見田辺の次元への逆戻りのように見える。少くとも、個の全への背反、分裂そのもの、従つてまたその分裂の統一は「科学的洞察を超えている」という時、彼は第一論文の立場から全く変つていないように見える。だがしかし梅本は、「科学」と外なる「無」の領域との対立を、第二論文で「科学的真理」と

「実存的支柱」の二原理的対立に移した時、巧みに議論を「唯物史観」そのものの次元から現実の「唯物論者」の次元へと、抽象的觀念の世界から事実の世界へと移す途を開いたのであった。そして、そこで梅本が着目したもののこそ、「河上博士」が両者の「弁証法的統一」の上に到達した「無上の安心」であり、更にむしろ、「人民に訴える」や『獄中十八年』に於ける徳田球一らの「無我」なる「解放への献身」であった。

梅本によれば「絶対的無我とか、報いられることを期待せぬ解放への献身とか」いった、個と全の統一の「自覚は単なる科学的洞察によつて果されうるものではない」のだが、しかもなお「多くの場合すぐれた指導者にあつては、この……統一は確保されてきた」。それらの人々は「実際には……空隙を何らかの形でみたましている」と彼はいうのである。かくて梅本は、今や、ただ「理論からは省略されて」きたものを「理論の上に反映」させればよいのだ、と主張する。だが一体それでは、「科学」をこえたマルクス主義の「理論」とは何であるのか。勿論彼はそれには答えない。たゞ「すぐれた指導者」は、理論的にはともかく実践的にはその問題を解決していると強調するばかりである。

この時、梅本自身にも、一つの転機が訪れていた。そのような「指導者」の下にある日本共産党への急速な実践的接近である。そして彼は、おそらくこの年四七年の暮、実際に入党し、翌年一月、党の指導に従つてそれを公然化したのであった

四

だが、主体性論争の不毛さは既に始っていた。梅本の入党が実際どのような経路をたどつてのものであったかは別としても、この時期類似の経路がいかにインテリゲンチヤにとつて一般的なものであったか、またありえたかということについては、改めていう迄もない。梅本のいうように「ヒューマニズム」と「マルクス主義」の間に、否極端にいえばリベラリズムとマルクス主義の間にさえ、明確な垣根はなかった（例えば森田草平「共産党に入るの弁」を見よ）。ともかく田辺の弟子梅本にとつても、入党そ

のものがおそらくそれほど主体的なものではなかったのである。だが彼は選んでいた。

四八年三月『展望』に発表された「無の論理性と党派性―田辺哲学批判、特に第二次宗教改革の予想のために―」（以下第三論文）は、ちょうど梅本の入党の時期と推定される四七年二月二〇日の日付をもつ論文であるが、それをみてみよう。「マルクシズムの科学的真理は疑い得ぬ歴史的現実である」としても、「いかにしてわれわれは客観的な歴史的必然のなかに本来的に自己自身たりうるか」。彼は今やマルクス主義を「科学」の枠内にとどめぬにしても、この問いは、「唯物論の側」が「仕残した領域」に属すると梅本はいい、否むしろ、「仕残した」といい条、なお「よしんば唯物弁証法はこうした論理を即自的にふくんでいるにしても」とか、「その可能性を唯物弁証法が果して、全的に包括し尽しうるか」とか疑問を投げる。そしてその一方で、田辺については、派生的歪曲は勿論問題外としても、少くともこの領域で「心血をそそがれる態度には心から敬意を表し」、「絶対に矛盾するものの自己同一を基礎づけるためには空の絶対否定性はこの上なき論理を提供する」というのである。

同じ月の『理想』に載せた「唯物弁証法と無の弁証法」（以下第四論文）でも、事情は同じである。梅本固有の問題意識の領域、それは確かに「唯物弁証法の実践における最大の眼目」なのだが、しかし理論的には、「所謂無の哲学が課題とする」ところであって、唯物論の方はむしろ「理論的に閑却し」ている、と彼はいう。

では梅本は、田辺哲学に立つてマルクス主義理論を批判しようとするのか。否、少くとも彼の意識に於いては逆である。梅本は既に選んでいる以上、彼の書くべきなのは唯物論の理論的欠陥をつくことではなく「田辺哲学批判」なのである。「およそマルクシズムの原則と矛盾する一切のものが除外されなければならない」（第三論文）。こうして梅本にとっては何や、苦しまぎれに、「夾雑物」さえ払いのければ「種の論理それ自身としては全的にマルクシズムと一致すべきである」（同）という驚くべき「田辺哲学批判」（？）の立場以外残されてはいないのである。

梅本の悲喜劇はここにあった。彼は哲学「理論」家である筈であるにも

拘わらず、その理論の領域では、彼固有の問題は「無の哲学が課題とする」（第四論文）のであり、無の哲学が「この上なき論理を提供する」（第三論文）。他方「唯物論の側」はこの問題を「理論的に閑却し」（第四論文）て来たし、またそれを「果して全的に包括し尽しうるか」（第三論文）も心もとない。しかもなお梅本は、既に「実践」の場面では「唯物論の側」を選んでしまっているのである。彼は後退せざるをえない。「このような問題提起は、即自的な歴史展開の原動力たる階級的地盤に密着しているものにとつてはあえて必要としないことであろう」（第三論文）。「変革の実践の決意成立の場面」（第四論文）で、「すぐれた指導者」は既に主体的矛盾を解決していると、梅本は見る。そしてなお、「このような決意に指導された認識だけが……歴史的必然を認識」という以上、梅本は結局指導をうけいれてゆく以外ないのである。

五

いわゆる主体性論争は、ここから急速にブームを形づくっていった。幾人かの梅本に続く主体性論者が出現したが、またそれ以上に、多くの主体性論批判が現れた。言う迄もなく以上にみてきたような梅本主体性論は△正統派△たる「唯物論の側」の容れるところではありえなかった。中でも最も激しい批判を展開したのが、民科哲学部会の△正統派△松村一人である。彼は既に四八年一月に「現代観念論批判」を書いて自らの基本的姿勢を明らかにし、また古在らとの座談会「唯物史観と主体性」でも主体性論に言及していたが、二月共産党が九中総決定に基いて民主民族戦線の結成を社会党へ申入れ、労働運動や政党的レベルでも「主体性」確立といったことが問題となる中で、五月、「ブルジョア的人間観について」を公表した。彼はそこで、「現在、人民民主主義のための闘争にたいして、新しい思想攻撃がつよまりつつある」として、「哲学におけるマルクス主義の主体性論の修正の試み」もまたその主要な一つに他ならないとした。そしてその上で、いよいよ梅本に直接的な矛先を向けたのである。「『哲学者』の主体性論について」（『理論』六月）、「哲学における修正主義

「梅本克己氏の立場について」（『世界』七月）がそれである。とはいえ、ここでは改めてそれらに於ける松村の「修正主義」批判の論述を追う必要はない。（なお、後者の論文で松村は、「日本における哲学的修正主義の有力なものを過去に求めれば、初期の三木哲学はそれにちかいといえる」といつている）。いわゆる「教条主義」ないし「公式主義」とは何か。それは、「修正主義」が誤っている限りに於いてのみ正しく、しかも「修正主義」の提起する問題の全てを既に解決済みと見做す限りに於いて全く不毛な、そのような立場ないし議論を指すのである。

だが勿論そのことは、梅本の側に「不毛」を超えるものがあつたことを意味するのでは全くない。既にみた通り実際の「論争」以前に、哲学者梅本は「入党员梅本」に従属していたのである。彼に残された途は、少しの開き直りとそして多くの弁明の途でしかなかった。

少しの開き直り。松村の批判が本格化する以前、四月一日の日付をもつて『理想』六月号に発表された「批判と協同」（以下第五論文）をみよう。これは、直接的には小松撰郎の梅本批判を含む論文「実存主義と唯物史観」への反批判として書かれたものであるが、そこで梅本はいく。いわゆる「実存的支柱」を「マルクス主義は問題にしなければならぬ」のであつて、「科学としての唯物論が把握されるならば、この一つは疎外される」。そして梅本は「やむを得ざる状況下での唯物論の客観的偏向のために疎外された主体の領域」を問題にすることこそ「現代唯物論者の任務である」といい、それに対応して自らの立場をここに「言いうべくんば主体的唯物論者」という語で提唱するのである。

周知のように梅本主体性論の史的意義がとり上げられる時、多くはいわゆるスターリン批判の哲学に於ける先駆的萌芽として見られるのであつて、その際何より右の「唯物論の客観主義的偏向」ということばなどが強調されるわけである。そして実際梅本自身も松村への反批判の中で、「主体性論はどこまでも唯物論の機械化、客観主義化に対して提起せられたものであつて……」と答えている。が、しかし後六八年『思想の科学』での「……その自覚が明確に出てきたのは少しあとじゃないかと思うんです」という告白にある通り、少くとも明確な形では、このような姿勢はこれ

上廻れない。そしてまた、「問題意識」そのものは別としても、松村の批判が本格化してゆく過程で梅本は、このような「客観主義的偏向」の名で松村らを正面から反批判してゆくといった姿勢は全く見せずに、せいぜい、ひたすらなる弁明の合間にジャブの如くにいくつかの言葉をささみこむにすぎなくなつてゆくのである。

こうして梅本は、松村の批判をうけて、次々と多くの弁明に満ちた論文を産み出してゆく。彼は、自らの固有な問題を論じようとすれば「観念論」に傾く自分を発見するし、かくて「唯物論の側」に立とうとすれば弁明する他ないのである。もとより前述の通り観念論に傾く哲学者梅本より「入党员梅本」を先向させる途を、彼は既に選んでいたのである。九月『展望』に発表された「唯物史観と道徳」（以下第六論文）で彼のいう処によれば、「唯物史観での主体性論は現代の革命の主体がいかなる階級であるかを歴史的に科学的に説明することにある。そして戦略戦術の問題は根源的にはこの認識の上に立つて、……闘争の方法を決定する政治的問題である」。とすれば、「歴史科学の方法論としての唯物史観」と「唯物論における哲学的領域」とは、梅本の望む如くに分離が許されるだろうか。彼自らいう如く「この問題に関する科学的領域と哲学的領域とははっきりしていない」以上、そして「歴史科学の方法論としての唯物史観に固有の意味での主体性などもちこむ必要のないことが銘記されねばならない」と梅本自身がいう以上、彼のいう「主体性問題」そのものだけがなお「戦略戦術の問題」から離れて成立することは許されえないこととなる。

六

直接松村の批判に答えて書いた二論文、『理論』九月号の「弁証法的物質とその自覚の論理——松村一人氏の批判にこたえて——」（以下第八論文）及び『理想』十一月号の「主体性と階級性——松村一人氏の批評にこたえて——」（以下第九論文）における梅本の弁明態度だけをみておこう（なおこの二論文は、前者が『理論』六月号松村論文に対して同誌九月号で、後者は『世界』七月号松村論文に対して『理想』十一月号で応えたものであ

るが、実際の刊行日時の関係で内容的には前後関係が逆になっている。

「梅本氏の『主体性』……(の)その正体……それは要するに、労働者階級を指導力とする歴史の新しい動きにひかれはするが、しかしそれとの利害の深い連帯を知らぬ小ブルジョアのインテリゲンチアの立場である」として「氏がもつと決定的な前進をされること……を心から期待している」という松村の批判に、梅本は応える。「松村氏の批判は多くのものを私に反省せしめた」(第九論文)。「氏の批評は充分にうけ入れたいとおもう」(第八論文)。「氏の批評は卒直にうけとりたいとおもう」(第九論文)。「小ブル的」といった批判は「松村氏の悪意ではない」、「けっして松村氏のこじつけではない」(第八論文)。それは梅本自身が「多分に観念的残滓をのこしたため」(第九論文)であろう。「長い間観念論の洗礼をうけた私としては、こうした点にかかわらずことそれ自体観念的センスであるかとおもわれる」(第八論文)。今は「氏の批評に沿うて是正していくつもりである」し、また「今後ともいく度か過誤を犯すことであろうが、批判はそれから守ってくれるであろう」(第九論文)。そして梅本は党の方針に沿って、「今は、ともあれ一切をあげて民主民族戦線の結成を果し」て努力しなければならぬ、というのである。

勿論なお、一方で梅本は、ここでも「松村氏と私とは次元を異にする」(第八論文)といい、「問題の所在は、やはり充分に松村氏の視野にはいつていないようにおもわれる」(第九論文)ともがき、「真に主体的唯物論となる」(第八論文)道をさぐるうとはする。けれども右にみたように、基本的に彼が批判を「うけ入れ」、「批評に沿うて是正していく」という道を選んでいる以上、「主体的唯物論」とは言葉だけになる。「私自身の問題の所在を明らかにするにつとめた」(第八論文)といういい方も、今や、梅本独自の問題提起の宣言というよりは、自分の「観念的残滓」に「私自身の問題の所在」を見えるという言葉のように聞えるのである。

こうして梅本は、松村の批判をうけて書いた右の第八、九論文、更に続く一二月『哲学評論』に発表した、この多産の年最後の論文「唯物論と自覚の問題」(以下第一〇論文)で、完全な撤退を確認する。「マルクス主義の『空隙』はインテリゲンチア自身の空隙の投影である」(第八論文)。

ここにはもはや、勿論観念的な仕方ではあってもマルクス主義「科学」の理論的「空隙」を果敢につくという第二論文以下の積極姿勢はない。勿論一方で梅本はこのことばに続いてなお、「唯物論の主体的領域は、そうしたインテリゲンチアの『空隙』の所産を媒介として意識的にとり出されるといつてよいであろう」(同前)といつて、そこにインテリゲンチアの「任務」(第一〇論文)をみようとする。だが、この点に関しても、例えば第三論文に於いては、「主体性要求の問題にかかわらずのは知識階級固有の現象である」とされつつも、しかもなおこの問題そのものについては、「もはや知識人固有の問題ではなく、総じて人間一般本質の可能性にかかわるのであり、そうした意味でこの問題のふくむ論理性は哲学としての唯物弁証法そのものにとつても一つの不可避の課題たる意味を失わない」という、いわば堂々たる開き直りがみられた。けれども今や、この開き直りすらみられない。インテリゲンチアの独自の任務と見えたものも、「マルクス主義がプロレタリアートの外部からおこったためのやむをえざる制約」(第九論文)にすぎなかったということになる。

かつては「すぐれた指導者」に於て主体性問題は「実践的に」解決されているといわれた。今や格別の「指導者」たらずとも、一般にこの実践的態度は、およそ「マルクス主義者が確固として、自明の理としてうち立てている」(第八論文)ものなのである。何故か。「プロレタリアートこそ歴史の主体であり」、「この立場に立つインテリゲンチア(は)……、……、……プロレタリアートの意識によつて、たえず変革され、また積極的に自己を変革せしめつつある」(第九論文)からである。だが、それではプロレタリアートにとつての「主体性問題」はどうか。しかし、プロレタリアートにとつては、梅本の提起した問題の一切は、全く成立しえないのである。彼はいう。「歴史の原動力たる位置に密着する階級としては、歴史的必然、彼らの自由意志の表現であり、必然の認識はただちに、自己の自由の条件となる」(第八論文)。

だがもしそうなら、梅本にとつて、自らの問題提起の全ては何であったというのだろうか。彼はいう。例えば自分こそまさにそうして来たように、「このような問題に関心を集中させる」ということは、さし当って唯物

論にとっては重要なことではなく、かつまた有害なことである」、「有害である、乃至はさし当って必要でない」(第一〇論文)、と。かくて、せいでいなお残る問題は、しかもなお自分のように且て、あるいは「現にその問題にひっかかっているものに対しては、やはりそれに応じたかわり方を示す用意を怠るべきではない」ということと、そしてまた、そのような問題は「現に明らかな階級的意図をもって」出現しているのだから、「そうした階級的地盤と哲学の名のもとにいんべいされた階級的意図を暴露すること」(第一〇論文)だ、ということになるのである。無残とでもより他いいようはない。

七

云う迄もなく、いわゆる「主体性論」をめぐる議論はなお続く。松村と梅本は対談をし、多くの論者の論文が現れ、梅本自身もなお積極的発言を重ねる。だが右にみた松村、梅本論争をこえた問題は、さし当り本ノートの関心でない。この論争で何が現れ、そして何が消えたのであるか。後に(一九七六年四月『流動』)、この論争を通じての梅本をふり返って、ある論者はいった。「……型にはまったトコロテンのような論理に対して、こうした弁明とも反論ともつかぬ見解を発表した梅本の立場は、検閲官の前でイデオロギー問題の弁明を自らしている知識人の姿であったことはいうまでもなからう」(野田茂徳)、と。だがしかし、それにしても、この論争の不毛さの責任は、少くとも「検閲」の側にだけあるのでは決していない。

ずっと後になって梅本は、一方で且ての自らを「過渡期の意識」と規定しつつ、問題が「哲学における主体性論のばあいきわめて観念的な形で提出された」、「問題提起の方法そのものが非マルクス主義的であることはあきらかである」という(五九年『過渡期の意識』)。だがまた他方ではしかも、「いわゆる哲学における「主体性論」が……片づけられたのは、四八年から四九年にかけてである。しかしそれはジャーナリズムの方の都合であって、私自身の方では一向に片づいていない。正統派唯物論のこの

問題に対する解答も原則論による問題回避に終わっただけであった」というようないい方をするようになる(一九六一年『唯物論と主体性』第二部への追記)。だが、スターリン批判以後いわゆる「正統派唯物論」批判の議論の地平が格段と拡った時点でのこのような梅本の開き直りには余り意味はない。論争は「片づけられた」のではなく、梅本自身の弁明によって「終わった」のである。

周知のようにこの後、例えば田中吉六『主体的唯物論への途』(五〇年)や黒田寛一『ヘーゲルとマルクス』(五一年)をはじめとして、梅本主体性論を踏まえた諸論が展開してゆく。そして、本ノート冒頭にも触れた通りそれは更に、より大きな拡がりへと流れてゆくことになるのである。けれども、勿論梅本自身もなおその中でくり返し発言を続けていったにしても、少くとも八論争Ⅴでの梅本の立論は、そのような流れを自ら積極的に切り開いたのだというには余りにも不毛であったという他ない。

おそらく、その不毛さは既に論争以前の梅本の出発点にあったのだ。梅本は『唯物論と主体性』第一部への追記でふり返っている。敗戦直後、「私は私自身のそれまでの思想系譜との対決を迫られていた。ついにファシズムに対して一矢も報いることができなかった自分の思想の敗北と、しかもその是認と同時にそれをすっぱりとは振り切ることでできない状態の中においてである」、と。だがその梅本の「自分の思想の敗北」とは、ただちにふり返って非転向党員の出獄声明「人民に訴える」に感激し、『獄中十八年』に感激するようなものであったのである。彼が「利己心を絶対に去り、報いられぬことを期待せぬ献身をもって……」という言葉の「絶対的無私」に心底より感激し、「私は死ぬかもしれない。けれども歴史の前途は明るい」という言葉の「底ぬけの楽天主義」に心底より感激してそれを引用した時、梅本に嘘はなかった。だがその時既に、彼の論争、というより弁明への途が定っていたのであった。もとよりここでは、現在の立場に立って、その八神話Ⅴを問題にしようとしているのでは全くない。たゞ梅本にとって、「自己の思想の敗北」の確認と、それに基づく「私自身のそれまでの思想系譜との対決」とかいったものが、たかだかその底のものでしかなかったことを、今は見ておけば足りるのである。

最後に。梅本主体性論とは何であったのか。梅本の所説は、実際の論争の中では、右にみて来たように弁明の海に完全に沈んでしまったにも拘わらず、一般には、少くとも、「唯物論の客観主義的偏向」への執拗な異議申立てを通じてみられるその△問題提起▽に於いてだけは、なお評価されているのである。もとより梅本主体性論が戦後思想史の出発点に於いてもっている位置は大きい。けれどもそこに人が見るのは、果して梅本の実像なのか。それとも、その後の△歴史▽が逆に作り上げた虚像であるのか。言い換えれば、論争の推移がどうであったにせよ、梅本は、少くとも△先駆的問題提起者▽ではあったのであるか。

私は本ノートを、戦後主体性論争から三木、戸坂をふり返っているいくつかの論者を例示することから始めたのであった。勿論本ノートは、三木論の補論とされているとはいえず、三木や戸坂を含む戦前の「主体性」問題を取り上げようというものでは全くなかった。だが今、梅本克己の所説を検討して来たノートを終るに当たって、一つの文章だけを掲げておくこととする。即ち、既に「……三木哲学の主体性は、主観主義と自らあえて呼ぶほど、それだけ客観性のない主体性である。『唯研』的唯物論が主体性のない客観性として、たんなる客体主義であるのと、対蹠的である」（「ジャーナリズム哲学の現状」）、と書いていた梯明秀は、一九三七年「唯物論と主体性」で、次のように述べているのである。もとよりここにいう梯の「主体性」と梅本の「主体性」とはただちには同じでなく、またそれぞれの背後に、一〇年をへだてて存在する歴史的社会的な「主体性問題」もたゞちに同じではないのであるが。梯はいう。「唯物論における主体の有無の問題は、そこにおける哲学の有無の問題と同一である。……わたしとしては、唯物論は主体的にのみ成立するときめ、そして、主体性を軽視するものがあれば、それは唯物論を歪曲するものである、と繰りかえしているわねばならない。主体性を軽視する唯物論者といえども、すべて主体的に理論的な活動を、さらに実践的な活動を、やっているのである。そのかぎりでは主体性をアンジツヒにもっているのだ。このアンジツヒなものを、フュールジツヒに持ちだせというところに、問題提起の積極性が、わたしには、あるのである。そして、当面の危機においてアン・ウント・ヒュ

ールジツヒに主体的であろうとするとともに、唯物論哲学の現段階的課題があるのではないか」。

一〇年後、梅本主体性論とは何であったか。